

これからは、
医療と介護でまちづくり。

第3回

子育て



子どもの不調と親の不安をいつでも取り除いてあげられるように

大分こども病院 藤本 保 医師

「どんな病気なことも、子どもの不調は親にとって大きな不安となるでしょう」
大分市の大分こども病院は、不安や心配があればいつでも子どもの様子を診てもらい、相談できる場としてのサポート体制を整えている。病気のことでなくても子どもの様子を見てもらい、小児科にもかわらせてほしい。そんな思いを持って、藤本保医師は地域の小児医療を支え続けている。

小児のトータルケアを 実践できる場として

大分こども病院では、救急医療予防接種・乳児健診・病児保育をトータルケアの4本柱として、24時間、365日の救急体制を敷き、病気の子どもを受け入れている。藤本医師が開業以来徹底した救急体制を整えてきたその理由と理念は、研修医だったころの恩師のひと言にある。

藤本医師が研修医1年生だった夏、当直の深夜に、若い母親が「蚊に刺された」といって生後5カ月の赤ちゃんを連れて大学病院に飛び込んで来た。当時まだ日本脳炎の感染例が多く、死亡する子どももいたため、それを心配してのことだった。藤本医師は、感染しても症状が出ないケースも多いことや感染後1〜2週間しないと症状が出ないなどを説明して母親を帰した。その翌朝、藤本医師が「蚊に刺されたくらいで病院に駆け込んで来た母親がいた」と報告すると、「どうしてそのお母さんは、そんな夜中に小さなお子さんを連れて来られたのですか」と恩師から静かに問われたのだ。「子どもに対する親の心配がどれほどのものであるのか、当時の私には思

い至らなかったのです。その問いかけが私に「小児医療の本質とは何か」を考えさせ、大分こども病院の理念の基となりました」

子どもの病気とそのケアを学ぶ「病児保育」

「医療に従事している人であつても、自分の子どもが体調を崩せば、冷静でいられなくなるものです。医療の知識の少ない普通の親であれば、その不安は計り知れないでしょう。そんな不安を少しでも取り除くことができたいと思っています」と藤本医師は語る。病児保育事業は、国の施策として、「病児デイケアパイロット事業」に始まり、1995年から市町村補助事業として「乳幼児健康支援デイサービス事業」「乳幼児健康支援一時預かり事業」と名称を変更しながら全国各地で展開されている。市区町村によって利用できる子どもの年齢や料金は異なるが、大分こども病院では、生後3カ月から小学校3年生までの病児が1日（8〜18時）2000円で利用できる。「病児保育とは、子どもが病気で保育所などに行けないとき、単に保護者にかわって世話をするための場ではありません。病気の子どもにとっ

て快適な環境と専門家による適切なケアによって、苦痛なく過ごせるように保育と看護を行っています」。一度利用した人は必ずリピーターになるという大分こども病院の病児保育では、家に帰ってから、親ができるケアについても丁寧アドバイスする。「薬の飲ませ方や、食欲のない子に栄養をとらせるためのレシピなど、看護師や栄養士が家でも簡単に実践できる方法をアドバイスしています。親にとっては相談する人がいることも大きな安心感につながるでしょう」

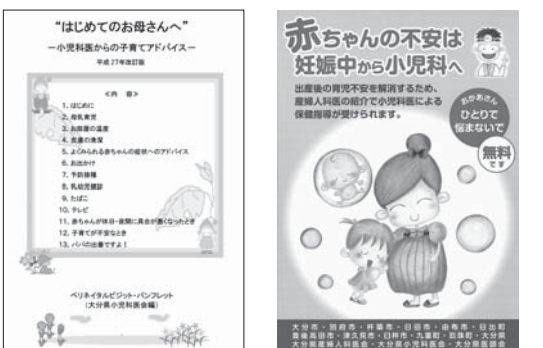
「親の充実感と安心感が子育てにおいてはとても大切」という藤本医師は、親の不安やどんなことに困っているかにも常に目を向け、耳を傾けている。

安心して子どもを産み育てられる地域をつくる

藤本医師が地域と連携を深めて病児保育とともに行っているもう一つの活動に「育児等保健指導（ペリネイタル・ビジット）」がある。これは、厚生労働省が92年から子育て支援の一環として始めた「出産前小児保健指導（ペリネイタル・ビジット）」を、お産の前だけでなく、産まれてからも産科医と小児科医とが連携して子育てにかかわっていくという取り組みだ。「産科医にとっては、産まれた後も、小児科医にとっては、おなかの中にいるときから、子どもとかわることができ、子どもの健康状態や養育状態を共有していけます。私たちは、バトンタッチではなく、切れ目や継ぎ目のない子育て支援を目指しています」

子どもの貧困や未成年妊産婦、未婚の母など、本人たちだけではその問題の根本を解決することが難しい、社会的に弱い立場にあるケースほど、早くから地域でサポートしていく必要がある。地域の保健師、産科医、小児科医が連携し、そういったケースを早期に発見できれば「幼い命が不幸になる前に救えるはず」と藤本医師は言う。さらに「こうした制度が整い、その使い方をみなさんにきちんと伝えていければ、子どもを持ちたいという若い女性ももっと増えるのではないかと」。大分のペリネイタル・ビジットを始め、九州では地域での子育て支援が進んでおり、出生率が上がっている場所もあるという。「少子化が大きな問題となつていますが、社会がもっと子どもを取り巻く問題に目を向け、子どもを産もうとするお母さんの不安を取り除き、地域でサポートしていく体制を整えていけば「子どもを持ちたい」と思う人は自然と増えていくのではないのでしょうか」

子どもを持ちにくい、育てにくいと感じている若い人が多い現状に、藤本医師は静かに問いかける。



■ ペリネイタル・ビジットの紹介パンフレット(大分県小児科医会編)

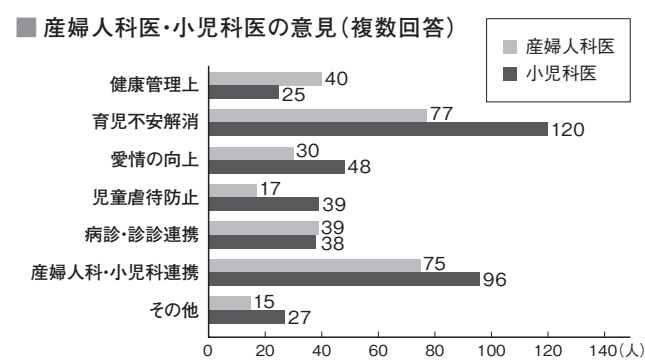
広告特集

企画・制作 朝日新聞社広告局

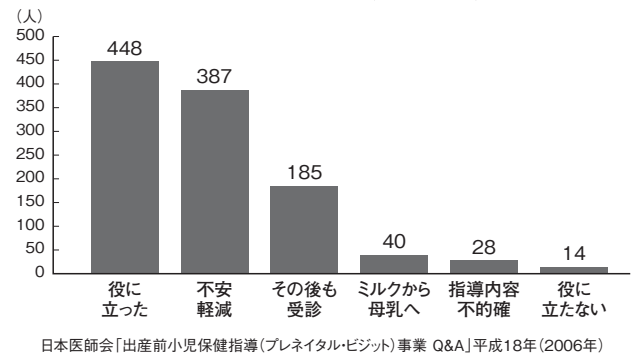
大分こども病院 藤本 保 院長

久留米大学医学部卒業。1989年藤本小児病院開業(現、大分こども病院)。専門分野は小児感染症、感染免疫、化学療法、予防接種、心身症。

プレネイタル・ビジット事業



育児指導を受けた母親等の意見(複数回答)



地域医療を担うドクター紹介



医療法人社団 愛育会 福田病院 病院長

河上祥一 医師

かわかみ・しようち／琉球大学医学部卒業。熊本大学医学部附属病院、九州厚生年金病院、水俣市立総合医療センター、飯塚病院などを経て2006年から現職。

産まれてくる赤ちゃんの幸せを最優先に、地域とつながる医療

「また来てくださいね」。そう言えるのは産科だけであり、喜びだと、研修に来る若い医師たちに伝えていきます。命の誕生に携わる医療には、24時間365日、安心して産める医療機関と体制が必要で、熊本市内には新生児集中治療室(NICU)のある病院が四つあり、お互いの状況を共有し、県外への母体搬送を極力減らすために連携を図ってきました。赤ちゃんにとってもお母さんにとっても、できるだけ近くで、負担のかからないケアができることが大切だと考えています。

「産まれてくる赤ちゃんの幸せが番」と考える当院では、特別養子縁組のあつせんも行っていきます。安全な出産と母子の健康、産まれてきた命の幸せを考えると、医療機関がかかわることは自然な流れでしょう。院内の臨床心理士や社会福祉士、児童相談所などと協力し、子どもの出生を知る権利を保障する制度も整えています。ただ病気を治すだけでなく、命の誕生と成長をサポートする機関として、地域とともにさまざまな角度から育児支援に携わっていきたいと思います。(談)

私たちは地域医療推進活動を応援しています 佐藤製薬、沢井製薬、第一三共、中外製薬、東和薬品